

『國華』にみる新来の中国絵画

—近代日本における中国美術観の一事例として—

久世 夏奈子

近代日本は中国美術をどのように認識してきたのか。その一事例として、近代以降に日本にもたらされ『國華』に掲載された「新来」の中国絵画について、その作品解説と関連記事を、近代以前より日本に現存した「古渡」の中国絵画の状況と比較しつつ分析する。その結果、「古渡」によって形成されてきた認識の偏りを認め、その偏りを「新来」によって補完することを試み、中国絵画の内的発展を理解しようと努めたことを本発表では明らかにする。

従来、近代日本における中国美術観は、「東洋の盟主」や「大東亜共栄圏」という国家主義的イデオロギーとの関連で論じられてきたが、本発表では 1900 年代以降の中国大陸をとりまく情勢の変化と、それによって日本にも将来されるに至った「新来」の中国絵画について具体的な事例と作例によって検証する。

『國華』では早くも 1900 年代に、ヨーロッパ諸国及び日本の中央アジア探検により将来された主に唐代の発掘品、また東京帝国大学の山東省石廟調査により将来された漢代画像石の拓本・写真が紹介されていた。特に重要な契機は、辛亥革命以前の 1910 年秋に『國華』主幹の瀧精一が当時北京在住の中国人所蔵家の所蔵品を調査し、また京都帝国大学が北京で行った敦煌発掘物の調査にも合流したことである。この成果をうけて、1911 年 3 月に瀧は「支那画に対する鑑識の変化」を発表し、特に古渡の偏りと中国大陸に現存する作例を調査する必要について力説した。さらに同年 9 月、國華社で「支那画」展を開催し、当時将来されたばかりの新来を国内の古渡との比較によって提示した。

1910 年代には中央アジアの発掘品や瀧が北京で調査した中国人の所蔵品だけでなく、辛亥革命後に来日した中国人の所蔵品もまた本格的に掲載され、『國華』における新来紹介の第一の波となった。そこで特に注目されたのは、六朝・唐代の道釈画や風俗画のほか、明代・清代の文人画である。一方 1910 年代にはすでに大陸から直接流入した新来を所蔵する日本人が現れたが、それらの作品群に対して『國華』は他の媒体よりもその鑑定に慎重な姿勢を示した。従って日本人の所蔵する新来が本格的に掲載されたのはようやく 1920 年代後半以降であり、それが『國華』における新来紹介の第二の波となった。そこで特に注目されたのは、元代末期の文人画と北宋時代の山水画である。

このように、新来の中国絵画は古渡とは全く別の経路や市場からもたらされ、日本人所蔵者の場合には中国の文物のみを好んで蒐集する傾向があった。また、その歴代の所蔵者は近代以前の中国の宮廷や文人であり、その鑑定には従来の古美術商や数寄者よりも京都帝国大学の内藤湖南らが活躍した。さらに、1930 年代以降には「国宝」の指定や「重要美術品」の認定をも受けたが、その諮問機関の委員には瀧や内藤が含まれていた。新来において特に注目されたのは、古渡に十分な作例のない、従って日本と何らの関わりも見出しにくい作品群である。彼らはそのような新来を積極的に紹介することで古渡の偏りを補完し、中国絵画の全体像を可能な限り把握しようとしていたのである。